

コラム3

レポート：ドイツの若い夫婦たち

——チュービンゲン大学でのケース・スタディー

ミヒャエラ・オーバーヴィンクラー (Michaela Oberwinkler)

チュービンゲン大学同志社日本語センター所長

今回の発表の内容構成を説明しますと、最初はチュービンゲンという都市を紹介しようと思います。その後、友人を具体例として紹介しながら、ドイツの若者の生活や家庭観について考えたいと思います。最後はドイツのバース・レーシオ、つまり出生率についてお話ししたいと思います。

それでは、まずはチュービンゲン市の紹介です。

[チュービンゲン市]

チュービンゲン市はドイツの西南部、バーデン・ヴュルテンベルク州の中心にあります。ネッカー川沿いにあるチュービンゲン市は、シェーンブッフの森とシュベールビッシュアルプの台地の間に位置し、豊かな緑に囲まれています。

チュービンゲン市に大きな影響を与えたのは、1477年に創設されたチュービンゲン大学です。チュービンゲン大学はドイツ国内で五番目に古い大学とされています。歴史が長いだけあって、有名な学者が大勢います。

たとえば、ヨハネス・ケプラーという16世紀の優秀な天文学者はその一人です。主立った哲学者も少なくないです。たとえばフリードリヒ・シェリングやゲオルグ・ヘーゲルなどは哲学の中の観念論に大きな影響を与えた人です。

最後に、ノーベル賞を受賞したヘルマン・ヘッセという作家もチュービンゲンと親密な関係がありまして、とある本屋さんで——今は古本屋さんになっていますけれども——学びながら働いていました。

大学の影響が今でもいかに大きいかというと、人口を見ればよくお分かりになると思います。チュービンゲン市の人口は約8万3000人ですが、その3分の1、すなわち2万8000人は大学の関係者だと考えられます。学生をはじめ教員、職員などの大学関係者は人口の3割を占め、町の公園や川縁のベンチなどにはテキストを広げて勉強をする学生の姿が見うけられたりします。

チュービンゲン大学はキャンパスを持たず、町の各所に大学の施設が点在し、

まさに大学と町が共存していると言えます。

チュービンゲン大学は1477年にエバーハルト公によって創設されました。ですから、エバーハルト公がエルサレム巡礼の旅に行った時に見たといわれる棕櫚の木が、チュービンゲン大学のシンボルです。この木は、エバーハルト公がチュービンゲンに創り出そうとした「知のオアシス」を象徴するものだと言われています。また、彼のモットーであった「Attempto」というラテン語の言葉は、何かを思い切って試す、あるいは行うという意味ですが、これもそのまま大学のモットーになりました。

このモットーはチュービンゲン大学で勉強していた最初の女性、マリア・グレーフィン・フォン・リンデンにもぴったりです。男性しか大学に行けなかった1892年に、彼女は例外として学ぶことが許されたのです。正式な許可は10年も後で1904年になってからやっと得られました。

その時と比べると現在は大いに変わってきました。学生の半分以上は女性で、55.5%を占めています。それに対して、大学院生の女性率は37.0%だけです。さらに一番地位の高い教授になりますと、わずかの3.9%しかいません。男女平等になるまではまだまだ長い道のようです。

これでチュービンゲン市やチュービンゲン大学の現状がお分かりになったと思いますが、これからチュービンゲン大学を出た私の友人についてお話ししたいと思います。

とても小さなケース・スタディーですが、お聞きください。

ケース・スタディー

[K + C]

最初はCとKというカップルです。Cは1979年に生まれ、お父さんは裁判官で、お母さんは中学校の教師でした。Cが3歳になるまでお母さんが仕事を休みましたが、Cが幼稚園に行くようになってから、また働きはじめました。そのお母さんを見て、Cも教師の仕事を目指して、チュービンゲン大学で勉強し始めました。

KはCより9歳年上で、1970年の生まれです。お父さんは銀行員で、お母さんは家で絵の教室を開いていました。仕事場は家の中でしたので、Kが生まれてからも仕事をし続けることができました。Kもお母さんの影響が強くて、芸術にと

でも興味を持ちました。芸術家は自分には無理でも、芸術の教師にはなれる自信がある、ということで、本当に高校の教師になりました。

KとCが出会ったきっかけは、Cがその高校でインターンシップをしたことです。付き合って2年後から一緒に住むようになりました。Kが仕事で頑張っていたように、Cは勉強で頑張りました。今から2年前、彼らは結婚することを決めました。その1年半後、二人のあいだに子供ができました。運よく、Cはその前に卒業試験に全部合格していました。今からちょうど1週間前より、ドイツで正式な教師になるために必要とされている2年間もかかる研修をはじめています。CもKも家にいないときは、子供を保育ママに預けます。Cは将来、できれば4人の子供がほしいと言っていますが、仕事をパートの形で続けたいそうです。

[T + H]

次にHとTというカップルを紹介させていただきます。Hのお父さんはドイツ電鉄に勤めていて、お母さんは小さな店で働いていました。Hは1971年生まれ、2年後妹さんが生まれました。二人の子供が幼稚園に行けるまで、お母さんはお父さんが家にいる土曜日だけ仕事に出かけました。子供が大きくなるにつれて、お母さんは子供が学校に行っている間仕事を増やしました。子供が病気になってしまったら、近くに住んでいたお祖母さんに頼むのは通例でした。

Tのお父さんは会社員で、いつも仕事で忙しかったそうです。お母さんのほうは小学校の教師でしたが、Tのお姉さんが生まれた時、仕事を一旦辞めたそうです。Tは1970年に生まれたのですが、彼が高校に入るまで、お母さんは専業主婦として頑張りました。でも高校生なら、一人でも大丈夫だという考え方で、その時からまた働くようになりました。最初は週に2日間だけでしたが、子供たちが大学に行くのに家を出てから、またフルタイムになりました。

HとTは高校が一緒でしたが、1歳年上のTが卒業するまで、二人はお互いに興味がなかったそうです。先輩から本を借りたことがきっかけで、二人は付き合いだしました。その時Tはもう大学で勉強し始めていました。チュービンゲン大学ではなく、二人が住んでいた町からもっと近くて小さな大学で。Hは1年後に同じ大学を選びましたが、1年が経ったら、Tはもっと優秀な教師の下で勉強できるように電車で4時間も離れているチュービンゲン大学に移りました。それから二人はずっと遠距離恋愛でした。Hが1999年に数学部を卒業したとき、チュービンゲンの近くの大きな銀行で仕事を見つけたおかげで、二人は一緒に住めるよ

うになりました。それから二人は5年も普通に働きながら一緒に生活をしていました。なぜ結婚しなかったかという、いいタイミングが見つけれなかったからだそうです。周りの友達がだんだん結婚しましたが、二人だけは、結婚式の準備が面倒くさかったのか、そのままがいいと決め、事実婚の生活を送っていました。その時、2004年ですけれども、二人の間に子供ができました。生まれる前に結婚するかどうか、少し迷っていたらしいですが、妊娠で忙しくて、ちゃんとした結婚式を挙げられる自信がなくて、生まれた後にすることにしました。結局、生まれた子供(S)が2歳になってから結婚しました。去年のことです。

運がよくて、Sがとても元気な子だったので、Hは出産3カ月後また働き始めました。そのときは20%だけの勤務時間で、週に1日だけでしたし、「Heimarbeit」という形で、うちで仕事をすることができました。Sが6カ月になった際に、Hは仕事を50%まで増やしました。その半分は家でできましたが、今度は銀行の勤め先まで出勤することも週に2日ぐらいありました。その間Sは保育ママに預けられました。今年Sはもう3歳なので、幼稚園に行けるようになりましたが、近くの幼稚園は午前7時半から午後12時半までしか開いていません。Hは5時まで預けられるところを探してみましたが、どれも満員でスペースが開くまで2年ぐらい待つしかないらしいです。

Hが今一番困っているのは、Sが病気になったときです。Tは高校の教師で仕事を休むわけにはいかないので、H自身が休むか、車で1時間離れているTのお母さんに頼むか、隣に住んでいる親切なお婆さんに頼むかという3つの選択しかありません。

次の問題はHのご両親です。お父さんの具合があまり良くないらしくて、お母さんが一人で介護するのは心配らしいです。それでご両親の近くに引っ越すかどうか、というのも問題です。

それでも、Hはできれば、子供ももう一人ほしいし、4月から仕事を80%まで増やしたいそうです。

[B + J + U]

続いてはBとJ、そしてUという三人です。

Bのお父さんは小学校の校長でしたが、お母さんは専業主婦でした。Bは1974年に生まれ、2年後妹さんが生まれました。Bは小さいときよくお父さんの学校に遊びに行きましたので、小さいときから教師という仕事に憧れを持っていまし

た。教師になるために、大学で勉強し始めて間もなく、Bは大学の寮に入りました。

Jの場合は、お父さんは電気技師で、お母さんは看護婦として働きましたが、Jが1974年に生まれてから、ずっと家にいることにしました。それはJの妹さんの時でも続きました。Jは大学の2年生になるまで、ずっとご両親と一緒に住みましたが、2年生になると、長い通学が面倒くさくなり、大学の寮に引っ越す決心ができました。

Jが引っ越した寮がBの寮と同じで、隣の部屋になりました。この状況で知り合うのは当然で、付き合うまでにあまり時間がかかりませんでした。大学を卒業するまでずっと同じ寮でしたので、二人はお互いの性格をよく知り合うことができました。Bはとても几帳面で、綺麗好きで、Jはそうでもないこともよくわかった上で、卒業してから、一緒のアパートでの生活をためしてみましたが、よく喧嘩をしてしまったそうです。そのせいもあってか、Jは1年半後職場で知り合った女性と仲良くなり、別れ話をもち出しました。その挙句、二人は本当に別れてしまいましたが、Bは二人のアパートに残って住み、Jは新しいアパートに引っ越すことになりました。

Jが仲良くなった女性というのはUです。彼女はJより2歳年上ですが、1972年に生まれました。ご両親は農民で、2人のお兄さんもいますから、小さいときはいつも誰かが家にいました。Uも教師になりたくて、テュービンゲン大学を卒業しましたが、年が2歳も違うので、JやBのことは知りませんでした。Jが同じ学校で働き始めたとき、Uが目惚れしたらしいですが、Jには付き合っている相手がいることを聞き、自分の気持ちを必死に止めようとしたのですが、それでもJには伝わららしいです。結局、Jが一人で住んだのは1年だけで、一刻も早くUと住むため、一緒にまた新しいアパートに移りました。それは3年前の話ですけれども、Uは現在妊娠しています。二人は結婚するかどうかはまだ考え中だそうです。

[I + D]

最後に、IとDというカップルを紹介しようと思います。Iは1975年に生まれ、お父さんは教師で、お母さんは専業主婦でした。Iは、今ではとても珍しくなった7人兄弟です。Iは末子で、お兄さんが2人とお姉さんが4人います。

DはIより3歳年上で、1972年に生まれました。お父さんは公務員で、お母さ

んは銀行員でしたが、結婚してから専業主婦になりました。Dには2人の妹さんがいます。

IとDが知り合ったのは、大学で勉強し始めたばかりの時でした。その時二人はそれぞれ違う寮に住んでいましたが、ゼミが一緒でした。付き合ってから3年後、まだ勉強中の時に、二人は一緒に住めるアパートに引っ越しました。一緒に住んでちょうど1年が経った時、二人は結婚しました。それから卒業し、仕事を探し、Iは高校の教師、Dはソーシャルワーカーになりました。8年後、二人の間に子供ができました。それは去年のことですけれども、男の子で、Rと言います。Iはとても条件のいい学校で仕事を見つけましたので、今はDのほうが仕事を休み、Rの面倒を見ています。DにとってはRの面倒を見るのは本当に楽しいことで、すごく満足していると言っています。しかし、できれば、1、2年後はまた仕事をしたいらしいです。その時は近くに住んでいるIのお母さんに頼むことになるかもしれません。

IとDにインタビューした時、二人は「私たちは一般的なドイツ人ではありません。一般的なドイツ人は遅く結婚し、すぐ子供を生みますが、私たちは早く結婚して、遅く子供を生みました。」と言いました。

IとDの意見はともかく、実際私の友人は一般的ではないのかもしれませんが。その理由は、B以外、皆にはもう子供がいるという事実です。それに、将来、皆は今の子供だけではなく、もっと子供がほしいと言っています。それはドイツではもう珍しくなってしまったのかもしれませんが。現在のドイツのバース・レーシオ、つまり出生率は1.3%しかありません。それはどうしてでしょうか。あるいは、私の友人の場合は、どうしてそうでもないのでしょうか。もしかすると、それは先ほどご紹介させていただいたテュービンゲン市の環境にも原因があるのかもしれませんが。実際に緑の豊かなテュービンゲン市は何年か前、ある雑誌の中で、家族とのんびりとした暮らしのできる都市としてドイツの中では一番に選ばれました。

ただし、そこまで評価の高いテュービンゲン市でも、夜までやっている幼稚園がまだ足りないというのも残念ながら事実です。それでも、友人は子供がたくさんほしいと言っています。なぜなら、私の友人には教師として働いている人が多いからだと思われます。ドイツでは教師は公務員なので、自分で簡単に仕事の量を減らしたり増やしたりできる、恵まれた職業です。ですから子供と一緒に生活

するには一番いい状況だと考えられます。保育園があるかどうかという問題より、自分は子供のための時間があるかどうかという問題だと思います。大体の人は子供が生まれる前に保育園の現状なんか気にしませんし、知ろうともしません。それより、自分の生活の中には子供のための余裕があるかどうかという問題です。

それに、チュービンゲン大学のジェンダー・スタディーズの専門家であるクレコリー氏によると、大体の人は子供がほしいかどうかという選択をするとき、意図的にするわけではないということです。ほかの事で忙しくて、決めない間にだんだん年をとってしまうのですが、気がつくと、もう子供ができないという状況が多いそうです。若いうちに勉強や仕事で忙しくて、やっと息をつけるようになると、もう年をとりすぎてしまっているというのが現実らしいです。本当は子供がほしかったのかもしれませんが。

これからそういうことが起こらないように、何をすればいいのかを考えないといけないのではないかと思います。以上です。

[2007年1月19日に京都大学で開催された公開コロキウム「ドイツにおける高齢者問題と若者」(主催:21世紀のジェンダー政策と文化研究会・日本ジェンダー学会、助成:(財)サントリー文化財団)における報告]